

室津賀茂神社宋風獅子修復事業

賀茂神社 代表役員 岡 研作

<修復前>



一対 玉取り獅子 1 軀

総高 44.7cm

像高 32.0cm

兵庫県

解説

製作年代は、一対の2 軀が13 世紀末～14 世紀初頭、1 軀が13 世紀半とみられる。作者は不明。

いわゆる宋風獅子は、20 件程が知られる。その多くが九州西側に分布し、それ以外では山口県、岡山県、京都府に各1 件が知られる。兵庫県では初めての例で、加えて複数例からなる当資料は全国的に極めて貴重な資料である。

しかしながら、近年まで屋外の軒下に安置されていたため、破損が著しかった。欠失や折損が多く、表面の劣化が進行、彫刻面が失われ、調査さえ憚られるほどであった。

今回の修復では、クリーニング、石材強化、亀裂等の強化補填を行った。これにより、公開及び学術研究に資することが可能となった。貴重な資料を後世に伝えるために、大変有意義な成果である。

＜修復後＞



修復業者

公益財団法人元興寺文化財研究所

修復内容

表面に付着した埃や汚れを除去するクリーニングを行った。石材の脆弱化のため、過度な作業を避け、付着物等を最低限除去するに留めた。

石材を強化するため、全体に石材強化剤を含浸させた。さらに、一対の獅子像2 軀は、部分的な強化として底部のみ撥水剤に浸漬させた。

一対の獅子像2 軀に生じていた亀裂には、低粘度エポキシ樹脂系接着剤を注入、強化を行った。

破片類は、接合検討を行い、本来の箇所が特定できた部材を、エポキシ樹脂系接着剤により接合した。

間隙や亀裂等には、エポキシ樹脂系充填剤による補填を行った。

補填によって外観上の違和感が生じるため、上記充填剤に天然顔料を添加したものを用いて、擬石処理を施した。

室津 賀茂神社宋風獅子修復事業報告書

室津 賀茂神社 御中

公益財団法人元興寺文化財研究所

「室津 賀茂神社宋風獅子修復事業」について以下の通り修復作業が完了いたしましたので報告いたします。

1. 保存修復対象資料

一対	玉取り獅子	1 軀
	子持ち獅子	1 軀
一軀のみ	玉取り獅子	1 軀

計 3 点

2. 対象資料の概要と劣化状態について

修復対象の獅子像は、中国（宋）からの伝来品とされる石造の獅子像である。一対の獅子像 2 軀は白緑色の石材が使用され、台座を含む全体を一体に彫られている。一軀のみの玉取り獅子像は一対に比べると寸法は小さく、材質はやや赤色を帯びた灰色の石材にて制作されている。3 軀ともに十数年前までは軒先に置かれていたとされ、風雨等の環境変化を受ける状態にあったと思われる。

一対の玉取り獅子については、全体に石材の劣化、脆弱化が進行しており、頭部は以前破損した後に接着されている。現状接着のゆるみ等は確認されないが、接着面に間隙が生じている。また玉に添えられていたと思われる右腕部が破損し、細かな小片に分割されている。

一対の子持ち獅子は、石質は玉取り獅子同様に経年による劣化により脆弱化がみられ、表層部の剥離、亀裂が生じている。また頭部から肩にかけての上面を大きく破損、欠失している。左脚部にも大きく割れが生じ、不安定な状態となっている。

一軀のみの玉取り獅子は、表層部の大部分が剥離し亡失しており、石質の脆弱化が懸念される。

いずれの獅子像についても屋外設置に付着したと思われる地衣類の痕跡や砂泥等の付着物が

全体に見られ、外観を損なっている状態である。

3. 保存修復の基本方針

宋風獅子は今後、屋内の保管環境に置かれるため、風雨等の影響は受けないものと考えられる。そのため撥水处理は基本的に行わず、石質強化のための石材強化処理、剥離や亀裂等の脆弱化部分への補填強化処置、破損、脱落している破片の接着検討及び接着と形状の安定化を行う。

4. 保存修復工程と修復内容

4-1. 資料の引き取り

室津賀茂神社にて元興寺文化財研究所の職員が資料の状態を確認し、梱包を行った後、元興寺文化財研究所総合文化財センターへ搬入した。

4-2. 保存修復前調査及び記録

宋風獅子の劣化状況の調査を行い、写真撮影により修理前の状態記録を行った。

4-3. クリーニング

石材表面に付着した埃や汚れ、地衣類等を刷毛やブラシなどを使用し除去した。また精密機器用ステンレス製ワイヤブラシを用いることで、細かな石材の凹凸内部に強固に固着した黒ずみや地衣類等の汚れ等を可能な限り取り除いた。

クリーニング作業時に剥落の恐れがあった箇所については、シアノアクリレート系接着剤（3000RS：セメダイン株式会社製）により仮止めを行いつつ作業を進めた。また石材の脆弱化により強い圧力でのクリーニング作業は、表面を損耗させる恐れがあったため、過度な作業は避け付着物等を最低限除去するのみに留めることとした。

4-4. 石材強化剤の含浸

全体に石材強化剤（ワッカーOH100：旭化成ワッカーシリコン株式会社製）を含浸させ、石材を強化した。また、強化剤による石材の質感の変化を防ぐため、強化剤の含浸後はウエス等によって表面に滲出した強化剤の拭き取りを十分に行った。

含浸後は強化剤を十分に石材と反応させるため2週間以上の反応養生期間を設けた。

4-5. 撥水剤の含浸（底部のみ）

上記石材強化処置の実施後、一對の獅子像2軀は底部を中心にやや強度の不安があった。今後の取り扱い時において破損等の発生を抑制するため、部分的な強化として撥水剤（ワッカーOH100/MSE100混合液：旭化成ワッカーシリコン株式会社製）に底部のみを浸漬し、強度を向上させた。また、強化剤と同様に石材の質感の変化を防ぐため、含浸後は拭き取りを十分に行い、2週間以上の反応期間を設けた。

4-6. 亀裂の強化

一対の獅子像は表層の剥離や脱落の恐れがある亀裂が多数生じていたため、内部への浸透が期待できる低粘度エポキシ樹脂系接着剤（ボンドE 205：コニシ株式会社）を各亀裂へ注入し強化を行った。

4－7．破損部の接着及び擬石処理

一対の玉取り獅子の脱落していた破片類について、接合検討を行い、本来の箇所が特定できた部材をそれぞれエポキシ樹脂系接着剤（ハイスーパー：セメダイン株式会社製、アラルダイト2011：ハンツマン・ジャパン株式会社製）により接合した。破片を組み上げた後、エポキシ樹脂系接着剤（アラルダイト2013：ハンツマン・ジャパン株式会社製）により本体側へと接合した。

一対の玉取り獅子頸部の間隙や亀裂の発生箇所、上記接着作業後に生じていた接着面の間隙等について、形状を安定化させ強度を維持するためにエポキシ樹脂系充填剤（ボンドKモルタル：コニシボンド社製）により補填を行った。

また、補填部分の周囲との色調の差異により外観上の違和感が生じるため、上記充填剤に天然顔料を添加したものをを用いて擬石処理を施した。

4－8．保存修復後の記録と経過観察

以上の修復作業を終了した宋風獅子像の修復前の記録と照合し、写真撮影を行った。

4－9．保存修復報告書の作成

保存修復作業を行った内容及び材料等を明記した報告書を作成し、提出する。

以上

作業写真



石材表面のクリーニング作業





石材表面のクリーニング作業





石材強化剤の含浸





底部脆弱箇所の強化
(撥水剤の部分含浸)



破片の接着検討



破片の接着検討



獅子像腕部小片の接着
エポキシ樹脂系接着剤（2011）



獅子像腕部小片の接着
エポキシ樹脂系接着剤
(アラルダイト 2011)



腕部の本体への接着作業
エポキシ樹脂系接着剤
(アラルダイト 2013)





腕部の本体への接着作業
クランプによる固定



亀裂・剥離部分の強化
低粘度エポキシ樹脂の注入
(ボンド E205)



亀裂・剥離部分の強化
低粘度エポキシ樹脂の注入
(ボンド E205)



亀裂・間隙の強化補填・擬石処理
エポキシ樹脂系充填剤 (6504)



亀裂・間隙の強化補填・擬石処理
エポキシ樹脂系充填剤（6504）

